

# 牛とともに「アニマルウェルフェア+放牧」

別海町・高橋牧場



酪農が基幹産業になっている北海道東部の別海町。畑作などを経て、60年代から本格的な酪農を営む高橋牧場では、75haの広い草地で73頭（うち搾乳牛43頭）という適正規模のもとで、濃厚飼料を抑え、牛とともに生きる酪農を続けています。

## 1頭ずつ名前と呼ぶ

1931（昭和6）年に福島県から入植した先々代が、4年後に1頭の牛を導入したのが始まり。3代目の高橋正明さん（1979年生まれ）は、26歳の時にUターン就農しました。

ここでは、ホルスタインを中心に、ブラウンスイスやジャージーなどを飼育。「牛は（人間の）囚人じゃない」と考え、番号ではなく、1頭ずつ名前と呼んでいます。

5月中旬から半年間、牛たちを昼夜放牧し、搾乳牛と生後6カ月以上の育成牛は同じ群れで生活。冬場も午前8

時から午後3時ころまで外で過ごします（悪天の時は牛舎へ）。人なつこい牛が

多く、みずからすり寄ってくる姿が印象的でした。

高橋さんは5年前、30代から50代までの6人の仲間たちと、次のような理念を掲げる「放牧酪農家の考える食と生命の会」を設立しています。

- ・生きものがみんな幸せに
- ・競争ではなく、みんなが幸せに
- ・搾取されず、搾取しすぎない農業
- ・食の安全性を再考する農業生産者
- ・健康になれる牛乳・牛肉の生産
- ・土壌を健康に保つ（農薬や除草剤の不使用）

これらをもとに会員と消費者らがつながり、ドキュメンタリー作品の上映会などを通して、さまざまな放牧のスタイルを伝えてきました。

## 「Non-GMO プロジェクト」も実践

乳牛の主食は草類など繊維質を多く含む粗飼料ですが、大方の酪農家はタンパク質などの栄養を多く含む濃厚飼



耳標に書かれた牛の名前



牧場主の高橋正明さんと放牧中の牛たち

料も与えています（注＝穀物や粕類など複数の濃厚飼料を混ぜ合わせたものを「配合飼料」と呼ぶ）。

日本の飼料自給率は低く、濃厚飼料の9割は外国産。原材料のトウモロコシや大豆などは、圧倒的に遺伝子組み換え（GM）作物が多いのが実態です。

高橋さんは、外国産のGM穀物を原材料にした配合飼料を使っていません。7年ほど前に、GM大豆を栽培するアルゼンチンで散布されている、農薬が原因とみられる深刻な健康被害をテーマにしたドキュメンタリー作品を観たことが転換のきっかけでした。

2018年には、牧場として「Non-GMOプロジェクト」に着手。非遺伝子組み換えの配合飼料に切り換える一方で、北海道産の子実コーンも取り入れてきました。今では、自分の牧場で生産した粗飼料と国産のNon-GM配合飼料を給与。21年には、放牧地の有機JAS飼料認証も取得しています。

また、GM作物とセットで使われる除草剤「ラウンドアップ」の危険性について、高橋さんは地元の農業関係者に問題提起を続けてきました。こうした取り組みに対し、消費者から共感する声も届いています。

2020年には、既設のD型倉庫を出入り自由な「フリーバーン方式」の育

※高橋牧場  
北海道別海町中西別 179-9 ☎ 090-7519-8509



倉庫を改造しフリーバーン方式の育成舎にした

成舎に改造するなど、AWのレベルを高める努力も惜しみません。

## 放牧で発揮できる牛本来の力

「この子（牛）たちはすごい！人が食べられない草を食べて大きくなり、人が食べられる牛乳や肉に変えてくれる。草地に糞尿を戻すと土壌の有機物が増え、それらを分解するため生物多様性が生まれる。放牧すると牛本来の力を発揮してくれます」（高橋さん）

風景がきれい、生産工程が正しい、作られたものが美味しい、牛との共同作業が楽しい——この4つが「アニマルウェルフェア+放牧」の良さと力説し、実践は続きます。（滝川 康治）

牧場の看板

